

黄色いチラシ

平成4年8月1日号 No141

荻田印刷 TEL 41-8990
FAX1981年創刊 毎月1日2万部新聞折込
編集発行人：荻田 豊 上荻野車庫前名刺はチ見納請領封各種ボスタ
シール印刷承ります

水辺の恋しい季節に

木流しあれこれ

私の所属する丸打自治会青少年健全育成会では、毎年夏に海
底河原でバーベキュー大会を行っています。日曜日のこの日は、
場所取りのため朝六時にテント張りに出かけます。それでも、
前夜からのキャンプ者たちで河原は大賑わいです。
今年ひと夏で、相模川や中津川で遊ぶ人たちはどれくらいに
なるのでしょうか。
今月は、今より水量が多かった頃の川の話を探してみました。

★江戸の大火でひと儲け

オーイ、オーイ。この木が土場
着する時は、花のお江戸がまる
焼で、元締さまがおよろこび。
オホホン、ホラー、よいこらさ
のサー。ハァー、ヨイショナー。
ホラ、ホラ、ホラ、ホラナー。
山梨の道志村に伝わる「木流し
歌」(伊藤聖吉著「道志七里」)です。
材木を激流に流し、材木から岩
へ、岩からまた材木へとびかき
ながら、トビ口を巧みにあやつり
つつ下る日雇職人の口から出る
唄声です。

この唄は、江戸が火事で焼ける
と建築用材の値がはね上り、木流
しの請負い責任者である元締がニ
ッコリすることを歌ったもので、
江戸と道志川が直結していたこと
をしめしています。

徳川四代將軍家綱の明暦三年正
月、江戸の大火で、十万余人が焼
死した時、江戸城本丸も焼けおち
ました。その三月には、津久井と
三増山の御用材を伐って相模川を
下し、海路、江戸の霊岸島へ回送
して本丸を再建しています。津久
井の杉も「津久井丸太」「奥畑お

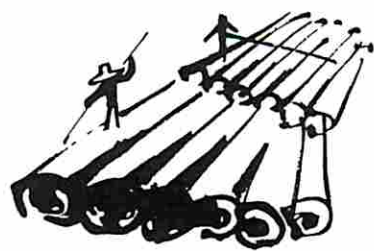
くばた」相模湖近くの地名「丸太
と呼ばれてその残をとどろかせて
いたそうです。

★木屋にはれるな……

海老名の国分寺も、用材や土台
石を相模川を下して建てられたと
いい、小田原北条氏のころも、材
木を流し、さらに小田原まで運ん
だ記録がありますが、木流しが盛
んに行われるようになったのは、
江戸に徳川幕府が開かれ、需要が
ふえてからのことです。

横浜の高島嘉右衛門が、平塚周
辺の林の払下げをうけたときには、
岐阜の山奥から木流し専門の職人
をやとってきて相模川を下しまし
た。山梨の道志村も、シーズンに
なると新潟、岐阜や木曽をはじめ
青野原あたりからぞくぞくと入り
こむ職人たちが賑わいました。

上流地方はまだイカダにくまず
「さ流し」(一本づつバダで流す)
のですが、アユも上れない激流の
中をどのようにうまく流すかは木
屋とよばれた職人たちの腕のみせ
どころです。しかし個人プレーだ
けではダメです。道志川は水位が
低く、材木がよく流れないので、



ところどころにセキを設け水位を
高めながら下すのですが、ひとつ
の区切りをうけもつ数人の職人の
気合がうまくあわないと円滑には
いきなないのです。木流し唄の「オ
ホホン、ホラー、よいこらさのサ
ー」は木はこのままの姿で流して
もよいぞという掛け声。「ハァー、
ヨイショナー」は、よきしたッとい
う受け言葉。「ホラ、ホラ、ホラ
ホラナー」は、気をつけて流せと
いう合図です。のんきそうな歌に
もきびしい意味があるのです。

シブキをあげる急流の中で、一
本の丸太に器用に乗り、足でクル
クル回したり、とび歩く離れ業を
みせる木屋のイナセな姿は、道志
村のスターでした。金づかいもハ
デ、竹を割ったようにカラリとし、
色男も多かったから、山にとざさ
れて、都会も知らず、地元の青年
しかみたことのない村の娘たちの

きながは舞見署
印刷承ります！

8月7日は立秋です。
この日以降はどんなに
暑くても残暑見舞いに
なります。

荻田印刷
☎41-8990

あこがれの対象になりがちだった
そうです。
「木屋にはれるな」とこの回状をま
わす、それでほれるヤツは村八
分」
こんな俗謡が村で唄われたもの
です。

(「相模川」神奈川新聞編集局著
昭和三十三年発行より)

★中津川の木流し唄

一つとせ 日の丸たてて御用木
丹沢山からきり出すダンノ
二つとせ 深い川瀬の向う前 材
木流して世渡りダンノ

三つとせ みなさん見物評判は
叶屋このかたないことダンノ

四つとせ 要領松火背負下り 雨
風なければよいことダンノ

五つとせ いままで見ても面白い
庄屋の角乗り目につくダンノ

六つとせ 村むら子供が見真似し
て 煮口かついでさいたりダ
ンノ

七つとせ 中津河原の材木は 素
麵台をみるようダンノ

八つとせ やんざらくりは七つか
ら 木じりと木ばなが賑やか
ダンノ

九つとせ ここは中津の川じまい
金田の河原へどば立てダンノ

十とせ 通るおひとの足とめて
見物させるが木流しダンノ

十一とせ 一文二文と取る日傭で
も 月日が重なりや金となる
ダンノ

十二とせ 庭におてっさん御用立
て 御用ののほりを立て置く
ダンノ

十三とせ 先は十がけの蕨の衆
木遣りの音頭も賑やかダンノ

十四とせ しびにて洩れ水つみ貯
めて 難なく通るが材木ダン
ノ

昭和61年8月1日号 No.69

荻田印刷 ☎ 41-8990

神奈中上荻野車庫前 毎月1日発行
編集発行人：荻田 豊 2万部折込み

暑中お見舞い
申し上げます
荻田印刷

黄色いチラシ

偶然のこと——小島日仁さんの手紙より

半原馬渡の妙誠寺住職の小島日仁さんからお手紙を頂きました。それはのどかなスケッチ文でしたので、早速編集し紹介します。

「ふだん記」運動の応援歌のつもりです。

「偶然」とは、辞書に予期しない、ふとしたこと、とあるが、全くその通りだ。

私は数日前、厚木市松蓮寺裏の横沢眼科院へ行ったところ、県下の名木・ミツバツツジの所有者である半原新久の柳川武夫さんと居合せた。

やあ、久しぶりだなあ。やっぱり目が悪いの？

あんで、俺じゃあねえんだよ。この孫（側にいる子）が少し悪いんで連れて来てるんだよ。

あ、そうかよ。よくないんてゐるんだなあ。僕、おじいちゃんとしていいなあ。いくつになったの？

二年生だなあ。

と答える。

家孫か？

あんで、こりゃあ荻野へくれと娘の子だあね。

あ、そうか。

家孫は世話なしだあね。俺は割りと暇があるもんだから、いつもこれを連れて来るんだよ。

なる程な。

この武さんは二十才位の時か、馬渡の大貫織維の前身である大和燃糸会社の番頭として数年間勤められ、私は大貫家の先々代から、毎月の命日にお経を上げに行った

ので、武さんとはよく知り合っている間柄で、武さんは小柄ではあるが、まじめでテキパキと仕事をするので、几帳面で厳格なおじいさん（和助さん）にお気に入りの番頭だったことを、四十年前も前のことが覚えていた。

こんなことを思い出していると、私の名が呼ばれたので、診察室に入った。

私は、早く来て受付をして置いて厚木へ行って来たので、丁度番になったんだよ。

あ、そうか。

治療室から出て来ても、僕（武さんの孫）の番はまだ幾人か先のようだから、先に帰ろうとしたら武さんが、

少し待っていられば、車で来てるから一緒に帰りましょう。

と、言ってくれたが、私はバスの半額券を持っているから、

結構だよ、先に行くから。

それじゃあ。

と別れて、バス停に待つこと二十分。まだバスは来ない。バスの来る方ばかり、まだかまだかと見ていると、目の前に車が止まり、中から武さんがドアを開けて、

と言われるまゝに飛び乗った。やあ、すまないなあ。今日は思



七だから。ほう、お上人は丈夫そうだなあ。若いよう。

あ、俺はまだ頭は黒いし、顔もしわくちやにならないので、誰にも十以上若く見られるよ。内臓はどこも悪い所が無いからよ。

それが一番だなあ！

こんな話をしているうちに車が、ひよっと止った。見ると「黄色いチラシ」の荻田印刷の前だ。孫が降りると同時に、中から若い奥さんが出て来た。

娘だあね。

あ、そうだったの。

馬渡のお堂のお上人だよ。まあ、お世話になります。

と、につこりしながら、私を見てすぐにわかったようだ。

この奥さんは中学時代毎日私の寺の庭を通るか、前の道を通るかしたから、すぐわかったわけだが、私は全然わからなかった。

何んだ、娘さんはここへ来てんのかねえ。

と驚いた。

今日は何んと偶然に懐かしい嬉しい日だ。早速このことを報告しなければと思った。

武さんの車は、

又寄るよ。

と言つてすぐ半原へ向った。

武さん、この頃、何か商売をやつてんの？

あ、俺は百姓だよ。

百姓だって今はいろいろあるからなあ。野菜や果物を作って売り出したり、植木や草花を作って売り出したりなあ。広い畑や田圃へ作るのは、デカイ機械でガラガラつとやちまうから、昔の様に朝から晩まで大骨を折って働かなくてよいからなあ。

京・古流
中庭「枯山水庭園」

造園工事完成致しました。
是非、お越し下さいませ。

上荻野の郷
中津屋

電話二一〇二二〇

黄色いチラシ

昭和62年9月1日号 No.82

荻田印刷 ☎ 41-8990

毎月1日発行 国道412号線沿線配布
編集発行人：荻田 豊 上荻野車庫前

カレンダー承ります!!



荻田印刷

芸術院賞とスタートは宮大工

— 関東大震災孤児 彫刻家 中村博直氏 —

今日九月一日は防災の日です。厚木市では去る三十日に東海地震を想定した防災時の訓練を全市一斉に行いました。
今年六月芸術院賞を受賞された愛川町馬渡出身の中村博直さんは、関東大震災で両親を亡くされました。

幼き日の思い出

中村 博直

には、笑い顔一ぱいの先生が見えられた。

六十三年前、大正十二年九月一日生涯忘れえぬ関東大震災の折り、当時六才の私は小学校一年生の夏休み中、中津川溪谷、馬渡橋下付近で毎日のように水遊びで、顔は真っ赤、背中はずす皮がむけただら元氣一ぱいであった。九月一日には二学期初めに当り隣村、田代小学校へ友達三、四人で行き、クラス四十五人が登校している教室



出だった。

家に着くと昼食時で、母が「今日は二人用事で留守よ、お父さんを初めあとは全部いるから一緒に食事をしなさい」と言われたが、先ほど先生より「父母の言う事は良く聞くんですよ」との言葉を思い出したが、母の意にそむき、先きにお茶づけをかつこんで家をとびだし川へ水遊びに行った。いつもは大勢の子供がいるはずが昼食時で私が一人、川原でうすべったい小石を拾い、川面すれすれに力一杯投げると小石はちよんちよんと二、三度水を切りながら水面より消えて、四、五回投げていると突然、川向うの山々がうすきみ悪くゴウゴウと音を出し唸りはじめた。身体がぐらぐらと凄まじく、立っておられずしりもちをつきへたばり、川向うの山からは大きな岩石がごろごろ、木々もたちまち川中へ、六才の私には何が何だかわからず、只々恐ろしいかきりで逃げだそうと土手の方へ、揺れが強くしがみつ、腹ばいながら土手をよじ登ってはころげ落ち、二、

店舗改増の為

九月十八日まで
休ませて頂きます。

上荻野乃郷

中津屋

☎ 四二一〇二二〇

〔中村博直氏略歴〕

大正 五年 九月十五日愛甲郡

愛川町半原 宮大

工秋松・タカの長

男として生れる

昭和 四年 愛川町田代尋常高

等小学校三年にて

半原小学校へ転校

後六年にて卒業す

昭和 四年 半原馬渡宮大工小

林茂太郎氏方に内

弟子として入る

昭和 七年 東京浅草仏師彫刻

上島亀雲方に内弟

子に入る(二十五才)

昭和十二年 現芸術院会員澤田

政廣先生に師事す

昭和 〃 年 五月召集を受け中

支戦線南京周辺の

守備を三年間努め

除隊

昭和十五年 澤田政廣先生に再

師事(二十三才)

昭和十六年 第二回召集

マレー作戦シンガポ

ール攻略戦に参加

昭和十九年 後二年間マレーに

居る

昭和十九年 第三回召集

千葉

県館山旅団司令部

にいる

昭和二十年 終戦後澤田先生に

再々師事(二十八才)

昭和二十一年 第一回日展初入選

(二十九才)

昭和二十四年 第五回日展特選

(三十二才)

昭和三十五年 第三回新日展特選

(四十三才)

昭和三十八年 第六回新日展審査

員(四十六才)

昭和五十六年 文化庁作品買上

(六十四才)

昭和五十七年 日展文部大臣賞受

賞(六十五才)

昭和六十二年 日本芸術院賞受

賞(七十才)日展理事

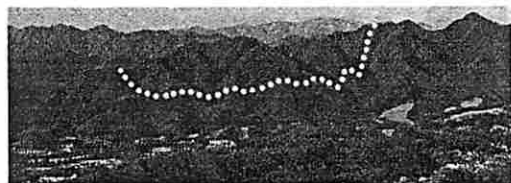
現住所

東京都国立市東四一八一七

電話 (〇四二五)七二一七五

黄色いチラシ

平成21年 5月1日号 No.342

荻田印刷 TEL 241-8990
FAX1981年創刊 毎月1日新聞折り込み
編集発行人：荻田 豊 上荻野車庫前

▲点線は30年後の西山稜線の推定位置です。

江の島淵追想 上

小島 瓊 禮

塩川滝の上流に、江の島淵という深い淵があるということは、子どもの頃から聞いていた。その淵は深く、江の島までつながっている。江の島淵というのだと、誰からともなく教わった。斧を落としたら、江の島に出たので、淵の水が海に通じていることが分かったという話もあった。それで海の塩水が淵から湧くから、その下流の滝を塩川滝と呼ぶのだという人もあった。

少年にとって江の島淵は、山の中の神秘的な世界に思えた。もちろんどんなところか、行ってみたいとしきりに願った。しかし、私の家には年寄がいない。その頃、用もない子どもを江の島淵に連れて行ってくれるような、ひまな大人はいない。塩川滝に行くことさえ、珍しかった時代である。

◇

それから五十年余り。ふたたび半原で暮らすようになって、愛川山岳会を主宰する佐々木力夫さんに知り合い、さっそく江の島淵に行ってみたいと申しあげた。佐々木さんは、即座に山登りにふさわしい季節になったら案内しようと思ってくれた。丁度その頃、壮年期の人生をかけて、丹沢山地の修行者が歩いた聖地を研究踏査している城川隆生さんにも出会って、ますます江の島淵を実見したいという気持ちが高まってきた。

江の島淵の位置を確かめ、その姿を目にせずして、塚原にあった清滝寺を舞台にした修行者の歴史を探ることはできない。それは相

模国、ひいては日本の山岳宗教を考えるためにも必要である。今や佐々木さんと城川さんから学ぶことによって、青春の夢は満たされることになった。人生とは、ありがたいものである。

◇

昨年の十二月、愛川山岳会で江の島淵に行くことになったと、佐々木さんからお誘いがあった。十日ほど後の十八日、午前八時半、佐々木さんに車で迎えていただき、江の島淵行に参加。半原越えの南山に向かう林道が、塩川滝の塩川の谷に近づいたところで、谷の左岸の斜面を沢まで下る。江の島淵の上流である。

以前はそのまま江の島淵のところまで、沢づたいに行くことができたが、堰堤ができたために、沢の斜面の中腹を下流に向かわなければならぬという。なるほど沢には高い堰堤ができていて、その上流一帯は土砂がたまって広い平地になっている。堰堤には、魚道だけではなく、周辺の地形によっては、沢歩きをするための人道も必要である。沢も立派な人間の道である。

その堰堤の上の右岸を、中腹まで登る。堰堤の下流の沢までは、二、三十mはあろうか、流れははるか下に見える。ロープを木々の間に張り、それを頼りに、沢に降りるのによさそうな場所を捜して、下流に向かう。中腹には、田代の中津川の左岸にあった小さな水力発電所に引く導水管が通っていた。かつてはこの道が歩けたというところどころにその跡が残っているが、すでに廃止になって久しく、今では道の用をなさない。

塩川滝と江の島淵のほぼ中間あ

たり、沢に沿って小さい平地が開けているあたりを目指して降りることにする。登山の心得のある佐々木さんたちが、谷の斜面に縦にロープを設置する。二十mはあろうか、ロープを握りしめ、足元に注意しながら一步一步沢に下る。その平らな砂地に荷物を置いて、身軽になって江の島淵に遡行する。すぐ上流は、岩盤の露出したところを沢が流れている。左右の岸は岩が張り出して狭くなり、しかもそこで沢は右岸側に曲つていて上流は見えない。その手前には、小さいが淵がある。夏ならば淵の中をじゃぶじゃぶと歩き通すところであろうが、周囲に足を支える岩はない。こんな岩のくびれを貫いて、沢は流れ続けてきた。

上流からいうと、流れは数十cmほどの小さな滝になって落ち、淵になる。淵の長さは一m余りである。佐々木さんたちが、左岸のいちばん出っ張った岩の角にハーケンを打ち込み、ロープを張つてくれる。ロープを両手で握り、足は岩に着けただけで、腕の力で体を支えて淵と滝の続く岩場を越える。そこを抜けると、左右に岩が開

け、なだらかな谷底に出る。水の落ちる響きとともに、高さ五mほどの滝が現われる。その滝壺が江の島淵である。宿願の江の島淵踏破である。この滝には呼び名はないという。滝があつての江の島淵である。淵に名称があつて、滝は無名であるという論理がおもしろい。そういうば、塩川滝の大きな滝壺にも、特別な名は聞かない。この日の江の島淵は、ほとんど砂に埋まっていた。この一年は大きな台風もなく、大水がなかったせいであるという。大雨があれば

水量が増えて滝壺の砂が掘れ、深い淵になるそうである。この日も水量はそれほど多くはなかった。滝の落ち口は、地形としては幅一m以上はありそうであるが、水はその左岸の端からやや斜めに、右岸に向かって落ちている。滝の流れはただ砂地に落ちているように見えるが、滝の下の水は、右岸の方から左廻りのように流れている。江の島淵の右岸の切り立った岩は、淵に臨む部分が大きくくえられている。高さ一m、幅二m、奥行き一mほどはあろうか。もう一回りは大きかったかもしれない。おそらくこの滝の水は、左岸から右岸に向かって落ち、岩の下の方にぶつかつていたのであろう。

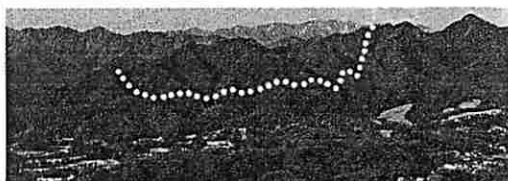
淵が一mも二mも深いときを知っている佐々木さんに尋ねると、淵の水は左廻りに渦を巻いていたという。案の定である。この滝の地形ができて以来、水はずつと右岸を削り続けてきたにちがいない。今我々がいつでも目にすることができるこの窪みは、砂に埋もれている淵の一部分ということになる。江の島まで続くほど深いと伝えられる淵の姿を、ここから推測することができ、現在の砂に埋まっている滝壺からは、広さもせいぜい二、三m四方の面積にしか思えないが、この洞の大きさを加えると、滝壺のまわりの砂地を含め、数m四方に広がる淵であつたと思える。それが昔日のおもかげを失ったのは、中津川流域一帯の川と同じく、関東大地震にともなう土砂の流出が原因であろう。淵の上流の堰堤の上に大きな河原ができて、いることにも、よく示されている。

◇

江の島淵のことは、天保十二年

黄色いチラシ

平成21年6月1日号 No.343

荻田印刷 TEL 241-8990
FAX1981年創刊 毎月1日新聞折り込み
編集発行人：荻田 豊 上荻野車庫前

▲点線は30年後の西山稜線の推定位置です。

江の島淵追想 下

小島 瓊 禮

たとえば江戸時代初期の書写である『相模大山寺縁起』には、山中の霊場を描写した中に、塩川滝とされる滝がみえている。「次に滝がある。両部の滝と名づける山を隔てて北に滝がある。滝の高さは七丈余である。これを金剛界の滝とする。……胎蔵の滝に対する（原漢文）とある。寛文五年（一六六五）成立の清滝寺の縁起である『今大山縁起』にも、同じ山中の霊場を記しているとみえる記述がある。清滝寺の「東には塩川の滝がある。七丈有余で、……これを金剛滝と名づける。常に胎蔵界の滝に対する」とある。

両部とは胎蔵界マングラと金剛界マングラのことで、修験が典拠にした仏教的な世界観を表わす図像である。大山から塩川滝に至る丹沢山地の霊場を、諸仏を配置する二つのマングラ図に例えたらしい。城川さんは、大山を丹沢山地の修行地の南東の入り口とすれば、塩川の谷は北東の入り口として、胎蔵界と金剛界をつなぐ特別な意味を持っていたとする。

この大山寺と清滝寺の記述をまとめると、金剛界の滝は古来、塩川の滝とも呼ばれた塩川滝とみるのが自然である。これに対するという胎蔵界の滝は、地元の知識によると、地蔵滝であるという。小松沢の上流で、扱首子との境に近いあたりで、塩川添九四七番と九四八番との間にある。高さは三十五mほどで、飛竜滝とも呼び、落ちたところから飛龍沢になる。これによれば、塩川滝と地蔵滝

で一对かと思えるが、別に地元の伝えに、金剛滝は蜀江滝であるとする。扱首子との境近くで、塩川添九四八番と九五〇番の間にある。滝より下流を蜀江沢とも呼び、塩川に合流するとある。そうすると、胎蔵界の滝を塩川滝とみること自体が疑わしくなる。

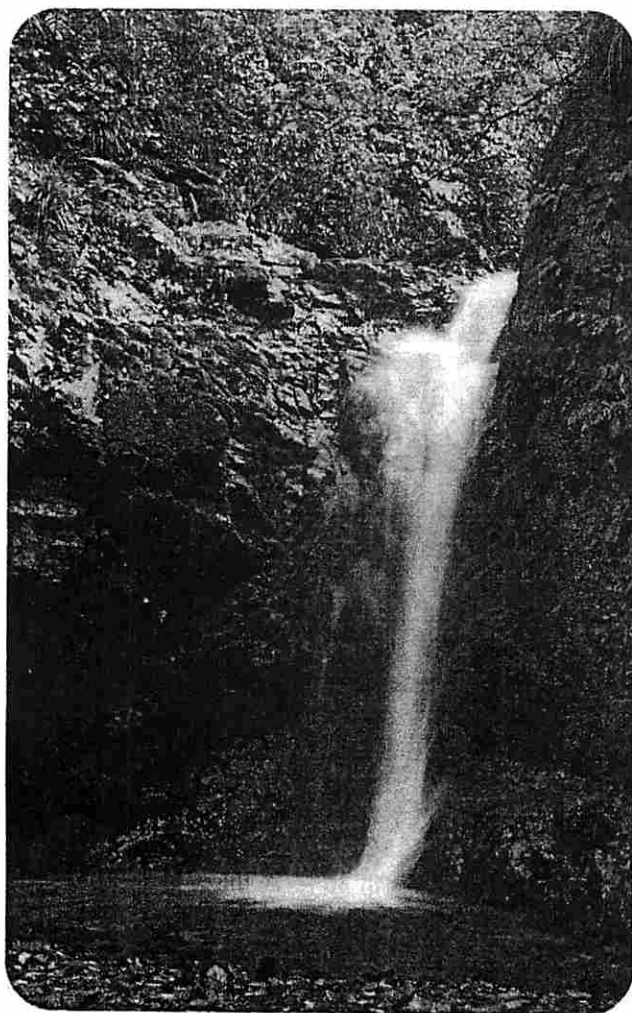
事実はそこに大きな塩川滝があり、塩川の滝とも称したという伝えがあるだけである。両部の滝と呼び、金剛界の滝に胎蔵界の滝が対しているとするれば、一对になるような二つの滝であるはずである。塩川滝は、他の滝二つからは少し離れ過ぎていて、塩川滝は別格かもしれない。

ところで塩川に合流しているが、扱首子に向かつては、南西よりやや西に傾いて直線的に流れている。また、地蔵滝の小松沢は塩川のやや下流で合流するが、やはり扱首子に向かつては、大柵沢のほぼ北西を、大柵沢に平行するように流れている。

どちらの滝も扱首子との境あたりにあるという、ちょうど二つの流れに挟まれた扱首子九五六番の土地の塩川添との小字境の東と西の端に位置していることになる。これは金剛界と胎蔵界と、二つの両部の滝と称するのに極めてふさわしい一对の滝の位置である。少なくとも地元の伝えで、両部の滝

滝寺跡から南山林道を七五〇mほど登った道の上下の地域で、大山から迎えた不動尊を祀ったという言い伝えのある場所の、周辺の傾斜面である。おそらく、かつて大山の不動尊をこの地に勧請し、清滝寺がその管理をしていたのであろうが、それは、すぐ下流の胎蔵界と金剛界の二つの滝の存在と、みごとに照応していた。

一つ一つ独立した伝えが、大山修験とのかかわりで体系化するという意味で、それぞれの伝えの信憑性を高めることになる。大山寺と清滝寺の縁起の宗教的な霊場の記述が、これらの滝の部分で共通していることにも符合する。蜀江



▲江の島淵（故・佐々木力夫氏撮影）

明治七年の地租改正による地籍図の原稿によって明治十二年に作成された『一村字限切図』で滝の位置をみると、蜀江滝の大柵沢は塩川滝のすぐ下流、飛龍滝現などを祀る塩川添九四九番の北寄りの

をこれらの滝にあてていたのにも、相応の根拠があったことを認めなければならぬ。

そこで興味深いのは、この九五六番の土地のあたりが大山平と呼ばれていたことである。塚原の清

滝を金剛界の滝とすると、『今大山縁起』という塩川の滝に相当することになる。『新編相模国風土記稿』が塩川滝の別称とする塩川の滝とも重なるが、ショッコウダキとはシオカワダキをつめた発音

黄色いチラシ

昭和58年9月号

No.34

荻田印刷 ☎ 41-8990

神奈中上荻野車庫前

毎月1日発行：半原・田代・荻野

入母屋造りで定評の

地元半原大工の 荻田 建築

愛川町田代1942 ☎ 81-0378

教えて下さい

菊地菊城(幕末に田代で)の漢学塾を開くこと!!

先日、高瀬慎吾翁の所に、中津春日台の植村喜代子さんという主婦の方からお手紙がありました。今月号の記事はこの手紙に端を発しました。

★大実業家・渋沢栄一を

育てた陸の漢学者

植村さんは、渋沢青淵記念財団竜門社の会員です。植村さんのお話によると、

渋沢栄一の伯父・渋沢宗助は、大豪農で、栄一が十四才の時、旅学者である菊地菊城を招聘し、学問所を開設しました。その時、栄一の師である尾高藍香が門弟となりました。

栄一の記念展示場は、生家のあった深谷市と、東京飛鳥山にありますが、栄一を育てた陸の漢学者・菊地菊城の遺品がありません。そこで、栄一の血縁で、元早大教授の吉岡重三先生が八方手を尽くされましたが発見されませんでした。その後、菊城が晩年を過ごした愛川町に住む植村さんが、その遺品捜がしを引き継ぐことになったのだそうです。

★菊地菊城とは

天明五年(一七八五)に、現在の埼玉県蒲田町大字台の生れで、青年期に江戸で当時の碩学山本北山について学び、漢学に通じ、剣道(天然理心流・近藤勇と同じ)も達者であったそうです。性格が勇壮で熱情があり、名利を排した誠実厳格な人物であったようです。人情のうすい時の世情をなげき、諸

国を巡遊し、その範囲は伊豆、駿河、甲斐、越中、越後にも及び、門人は三千人にも達したといわれています。諱(いみな)を武者、字(あざな)は明君、氏は菊地、号は菊城。

★郷土のかかわり

町田は小野路の小島家から、田代の大矢新九郎(現厚木北高大矢茂先生祖)の学問所創設を機に当地に來遊し、とどまって晩年を過ごし、青年子弟に漢学・実学を教育しました。

主な門人には、染矢勝元(染矢太郎氏曾祖父、半原村の里正)・村長、門人一〇〇余人を教育)、山田喜高、田島元竜、井上清澄(後田島三郎)、井上忠順(後花上市郎兵衛)、染矢確操、石井金吾、石井常教、柴田宗昔(後萩田)と、田代、半原、荻野、清川のそうたる人物が名を連ねています。柴田(萩田)、石井、田島元竜は医家、花上、田重三郎らは半原学校の師となり、特に、田島三郎は初代校長になっています。菊城没後の学問所は、山口平右衛門や旧幕家人林貞次郎(後甲賀)らがうけつぎ、両名は共に田代学校開校時に教師として迎えられています。

文久三年十二月二十六日、煤ヶ谷に山越えしようとして、半原の南山で大雪に降られ、病を発し上荻野の石井家で文久四年(元治元年一八六四)正月七日に亡くなりました。墓碑は、慶応元年(一八六五)

十一月に主だった門人により、田代平山の勝楽寺に、同寺の開基内藤三郎兵衛秀行の墓と向い合せて建立されました。上田下方の高さ一六六、巾七六、厚二四のもので、文武の師にふさわしく重厚な墓碑です。

★現存、井上五川との共同作品

井上五川(一七九一—一八七五、画家・上荻野打越井上定八の子・現丸打自治会長井上金作氏祖・法眼五流に学び、のちに江戸駿河台狩野洞白の門に入る・花鳥人物画を好くし、特に墨龍を得意とする)が、打越から馬坂を下り、海底村の、当時「紙漉き」をするかたわら、酒屋を営んでいた成井酒屋によく酒を飲みに来ていました。酒代がたまり、その支払いの代償に四枚襖に絵を描くことになり、四季の絵を描きました。そして、もう一枚、一富士・二鷹・三茄子の軸物の絵を描きました。そして、やはり、ここに酒を飲みに来ていた菊城が、私が漢詩を書こうと、絵の上部に漢詩を書き添えました。この軸物は、中津の足立原晴男氏が所有されています。足立原氏のお父さんが、この

寺の養育子供水

◆宗旨・宗派に関係なくご供養できます。
ご来寺・ご相談下さい。

地蔵尊霊場 清徳寺

愛川町三増1730 ☎ 81-2088

☆ 荻 沢 栄 ☆

(一八四〇—一九三二)

埼玉の農家の生まれであるが、漢学の教養が深く、一時は家業を放棄して仕官し、一橋慶喜が将軍となるや彼も幕臣となった。慶応三年慶喜の弟昭武に随行して渡欧し、滞在二年の間に先進国の資本主義文明に触れ、特に金本位制の資本主義を痛感して帰国した。まもなく大蔵省に入り、租税制、貨幣制の改革などに尽力したが上司と意見が異なり、明治六年英露戦争に転向した。以来わが国最初の株式会社組織である第一銀行の設立、日本銀行の設立、金本位制の確立など金融制度の確立に力を尽した。ついで王子製紙・日本郵船など多方面の重要産業会社の創立に関与した。わが国資本主義を指導し、前進させた功績は大きい。また実業教育を重んじ、東京商大の創立にも援助を与えた。大正五年英露戦争を隠退し社会事業・女子教育・国際親善・文化事業などに余生をささげた。

成井家から中津の足立原家に養子に行かれたのです。

★歌も一首

朝夕な七十過ぎる老の身の
なを仰ぎみる浦賀路のそら

この歌は半原の旧家に秘蔵されているものです。安政四年(一八五七)夏五月十六日 宿 西武極楽寺 菊地武香とあります。

★ご協力お願いします

植村さんは、菊城が、

一、どうして田代に來たのか
二、どこを宿としていたのか
三、遺品は

の三点を調べています。どなたか
お心当たりの方は、是非ご協力
お願い致します。☎八五一一一八七

なお、吉岡先生のお話では、菊城は、どの地に於ても塾を本材精舎と名付けているので、田代でもそう呼んでいたのではないかと、また、菊城論語は特筆するもので、一般の塾を小学校程度とすれば、菊城塾は大学教育であったとのこと

黄色いチラシ

昭和58年11月号

No.36

荻田印刷 ☎ 41-8990

上荻野車庫前発：半原・田代・荻野行
編集発行人：荻田 豊 8,000部

お年玉つき年賀ハガキに

カラーシールを!!

結婚・誕生・新築・ご一家の元気な姿を

地域に広げよう ふるさと探究の輪!!
菊城・五川 その後

中津春日台の

植村喜代子さんの手紙に端を発した九月号の菊城の地菊城の記事からいろいろ／＼広がりが生れました。植村さんからはその後の熱心な調査報告が十数回郵送されて来ています。

九月号が折り込まれた直後には上荻野の曾根秀夫先生（私の田代小時代の恩師）から五流の絵を所有している、また、田代上の原の山口巖さんから、菊城没後の学問所を受け継いだ山口平右

衛門は自分の家の先祖であり、判読出来ない古文書があるとの連絡に、植村さんがコピーし、専門家に読んで頂くとの報告がありました。そして、浪沢秀雄著の「浪沢栄一」と会報「青淵」が送られて来ました。

★町田・小島資料館を訪ねる

菊城は田代に来る前は、町田は小野路の小島家に滞在しており、この小島家は現在小島資料館として、毎月第一・第三日曜午後一時から五時まで一般公開していると知り、九月の第一日曜日にこれを訪ねました。小島家は三多摩屈指の名望家で、代々学者や異色の文人を輩出し、特に二十代為政は天然理心流の師・近藤周助の高弟として近藤勇とは義兄弟になり、新選組を後援した関係上、資料館には新選組関係の資料が数多く展示されています。また、横山大観、川合玉堂を始め近世日本を代表す

る書家、文人らの筆墨を数多く蔵し、近世日本の地方文化の厚みを物語っています。そして、当時の地方文化人の輪が、小島家を中心とした多摩地方から愛川、荻野方面に広がってきた過程が小島家の日記にうかがい知れます。

★菊城については

多摩中央信用金庫発行「多摩のあゆみ」第三十二号に小島資料館副館長・小島政孝さんが「小島家日記の中の小島鹿之助」と題して書かれている中に、菊城を次のように紹介しています。

性質は豪放にして、二十歳より山本北山に従って学び、のち遊学すること数十年、群書を博覧した。酒を愛し、講義の前には必ず梅の酒をぐつと飲みほしてから講義をするのが常であった。声は鐘のように大きく、はっきり話し、遠くにいる人も耳を傾けたという。蒼顔で、白髪に一尺余りのあごひげをはやし、常に長刀を佩してい

た。先祖は菊地武光といい、南朝をなつかしみ、児島高德桜樹に題すを好んで語ったという。外出の折には必ず桜の杖を供にし、腰にひさご杯をさげて歩いたという。居所は一定せず、ふらりと来て、気に入ると何日もそこにいて講義し、またふらりと旅に出るといふ漂浪の人であった。

★井上五川の師・五流について

十月号に五川の師である法眼五流は相沢五流と書いた所、数人の方に、厚木市の調査報告では良岡齋でなく、鳥岡齋になっているが、とのご指摘がありました。私は郷土史家でありませんが、確たることはわかりませんが、同じ法眼五流を名のり、竜の絵を得意とし、年代も五流（二七四六―一八二二）五川（一七九一―一八七五）と、まず間違いないものと思われま

今月下旬から火災予防週間に入ります。火災は消火も大事ですが、ださなことがなによりです。郷土の先人達は、火の用心。をどのようにしたのでしょうか。

今から二百年ほど前のことです。熊坂村（愛川町中津）の立道に「絵描き庄兵衛さん」という人がおりました。庄兵衛さんは絵を描き、時には畑を耕して生活していました。年老いてから妻子もなくさびしい独り暮らしでした。この庄兵衛さんは世を去るに際し、お別れに集った隣近所の人達と「私が亡くなったら、

火防せの消護さん

家は敷を処分の上、墓石を造り、お祀りしてください。そうしたら皆さんの信心によって、この立道最寄の火を防いであげます。どうぞお願いいたします」と堅い約束を交して息を引取りました。木枯しが雨戸を揺り始めた十一月一日

時は安永五年（一七七六）のことでした。

庄兵衛さんと約束を交した人達は、地類の者が中心となり、葬儀を済ませ、遺産を処分して曾根山の墓所に碑を建て覆屋も造りました。碑面には菩提寺の龍福寺から

子から孫に、孫から曾孫へと受け継がれてきました。

そんな行事が「消護さん」のお陰でしょう、それから二百年、立道最寄は火災に会ったことがありません。

昭和五十五年消護堂再建案内書より中津龍福寺福井周道氏提供

★そして新たにお願いします
小島資料館副館長の政孝さんが天然理心流の調査をされております。田代勝楽寺の奉納額にある岩淵秀治師範のことをご存知の方は是非お知らせください。

電話（〇四二七）三五二〇四六

昭和59年2月1日号 No39

荻田印刷 ☎ 41-8990

上荻野車庫前発：半原・田代・荻野行
編集発行人：荻田 豊 8,000部名入り封筒作りませんか!?
便利ですよ。
意外と安いものです。

黄色いチラシ

渋沢華子女史「渋沢栄一子爵尊孫」

上荻野源氏橋聴流庵を訪れる!!

昨年、九月号で菊池菊城、十一月号で岩淵秀治の調査を呼びかけ五ヶ月が経過しました。その間、多くの方々の暖かいご協力によりびっくりする程の広がりが見られました。今月はその途中経過を。

★次から次へと——人の輪——

十二月五日に渋沢栄一の血縁で元早大教授の吉岡重三さんと、渋沢青淵記念財団竜門社の長沢玄光さんが、菊城が晩年を過ごした当地を訪れました。小島資料館の政孝さん運転の車に、植村喜代子さんと、菊城と五川の合作の軸物を所蔵されている愛川町文化財保護委員の足立原晴男さんの案内で、菊城調査でお世話になった方々、菊城ゆかりの地を巡られました。途中、拙宅にもお立ち寄りいただき、その足で、相州病院に荻田良子さん（菊城の門弟・石井金吾本宅一桂小五郎＝木戸孝允がその昔訪れたそうです）を尋ねられました。高瀬慎吾翁の聴流庵では、翁が許多収蔵されている渋沢栄一やその一家に関する資料が披露されました。そして、翁の栄一に対する傾倒を、長沢さんよりお聞きした栄一のお孫さんである渋沢華子女史（渋沢秀雄先生二女）が、一月十五日、渋沢家の写真集である「柏葉拾遺」と渋沢秀雄先生が、父栄一を語った随筆集「明治を耕した話」の二冊を携え、聴流庵を訪れました。女史は大家のお嬢さんらしく、色白で堂々とした方であつたそうです。残念なことに、私はこの日、小島資料館に出かけてい

たためお会いすることができませんでした。

★論語で算盤をはじく

謹呈 高瀬慎吾様 落椿糸に通して姉弟 洪亭 昭和五十九年とサインされている秀雄先生著の「明治を耕した話」の一節に、

——父は終生孔子に私淑し、「論語」を人生行路の指針とした。そして国家、社会の公益や秩序を先ず孝えた上で事業経営に当たった。それを平易に「論語で算盤をはじく」などとも言った。即ち道德と経済は合一しなければならぬ。という主張である。そして父は懸命にそれを実践した。とかく利益追究には手段を選ばないエゴが付きまとう。父は経済界の先達の一入として、絶えず道德と経済の合一を強調しつづけた。今振りかえっても卓見だったと思う。

九月号に書きましたが、栄一は七歳から従兄の尾高新五郎宅に通い、四書五経を教わりました。その尾高は、栄一の伯父・渋沢宗助が招聘した旅学者・菊池菊城の門弟となっており、「菊城論語」は特筆するものであったそうだから、「論語」を人生行路の指針とした、栄一に多大の影響を与えたのは、まさしく菊池菊城であつたのでしよう。そして、なおいれいことに、同じ師である菊城に、私達の郷土の先輩もまた教えを乞うています。そんなことで、わが国最初の株式会社組織である国立第一銀行を設立した財界の巨頭・渋沢栄一子爵も雲の上の人でなく、なん

となく私達の身近に感じられませんでした。

~~~~~

勝樂寺の奉納額にある岩淵秀治師範のことは、菊城より少し時代が新しく、当地に長くかわつていた関係でか、多くの方々からいろいろとお教えいただきました。ありがとうございます。

岩淵調査では他にも興味あるお話しも伺うことができました。

★近藤勇の懐刀が田代に

中津竜福寺の隣にありました天然理心流の梅沢董一道場（董一の母が土方歳三の肉親）に、近藤勇が京に行く時立寄りしました。その時近藤が置いていった懐刀を、董一のひ孫に当る方が田代に婿養子にいられた時持つて来られ、現在も所蔵されているそうです。

★バクチが盛んだった荻野

荻野・舊尾の「古老に聞く会」発行のふるさと文庫第一号・岩崎トミさん（明治二十四年生）のお話しの中に、

——娘を製糸場にいかせて、その金を、博打ですってしまいう人もたしかいたような気がしますね。

博打といやあ、「バクセイさん」という博打好きの人も、馬場出身でいてねえ、その奥さんが、「おみねさん」といったが、もう古いことでは覚ええていませんねえ。

博打は、ずいぶん盛んで、男衆では、この村でやらない人が二三人くらいで、ほかはみんなやっていましたね。家の下に、室（むろ）があつて、そこで隠れながらやつ

たり、山にも、舊尾団地の向こう側の姥谷の穴のなかで、絶対めっからないとこでやつていたそうです。

また、ふるさと文庫第二号でも天利茂義さんが、

——博打をやったかつて？

うさなあ、明治の頃は、盆ごぎを敷いてな、サイコロ博打、イカサマ博打をやっていたなあ。けれど、その時分だったって、警察つてえもんがあつてさ、山で博打をやっているってんで、こいらの山を警察が歩いたもんさ。昼間から、山なかで博打やっているとっていつて……。おらあなんかの七つか八つの小せえ頃のことさ。盆ごぎ敷いてな。その頃は、遊びがなくてさ、庭の裏つ方でああ、あつちでゴロゴロ、こつちでゴロゴロ、よくやつていたなあ。そんでも、暮らしておれたなあ……。

昔は、「親分衆」があつて、博打うちの「お先棒」もいてなあ、そういうのがいなければ、博打もなりたたなかつたわけさ。浅間さまの大ケヤキの枝の上でハシゴかけて、昼間からやつていたこともあつたさ。高いところだから、見えやあしねえっていつてな。

このように、お二人のお話しでわかるとおり、荻野は大変バクチの盛んな所だったようです。そして、岩崎さんのおばあちゃんの話の中で出てくる「博清さん」のことが、岩淵秀治を調べていたらなお詳細にわかつてきたのです。このお話しをして下さった方は岩淵秀治と博清さん（花上清次郎）に深い関係のある方でした。次号三月一日をご期待下さい。花上清次郎が解明されます。